

そよ風

第8号

今治市立立花中学校

「あなたはどう受け止めますか？」

5、6年前のことである。ある会議があった。参加者は、今治市内の各中学校の代表生徒たち、PTA関係者、教員、社会教育関係者など百余名。開会行事の後、十名前後のグループに分かれて協議が始まった。テーマは「いじめ問題を考える」。自分たちの学校の現状と課題について意見交換し、大人も一緒になって考え、これからの活動に生かしていくことが目的であった。

私は、その会議の主催者の一人だったので、各グループを回り、話合いの様子を見守っていた。約一時間が過ぎ、あるグループのそばを通りかかったとき、ふと聞こえてきた発言に足が止まった。

「こんな話合いをしたからと言っていじめがなくなるのかな。」

私は振り返り、声がした方に目をやった。誰が発言したかは分からない。そのグループは、少しの沈黙のあと、何事もなかったようにまた話合いを続けた。

私はその場を離れながら考えた。さっきの発言はどんなつもりで言ったのだろうか。それにあの発言に対し、グループの誰も反応しなかったのはなぜだろう。

協議に関する発言と思わなかったからか。そう言えば意見というよりもひとり言、つぶやきだったような気がする。それとも聞こえなかったのだろうか。いや、離れたところにいた私に聞こえたのだからそのグループの人たちにも聞こえたはずだ。ではなぜ、みんなは聞こえなかったことにしたのだろうか。それから間もなくグループ協議は終わり、各グループ員は元の全体の席に戻った。

さて、閉会行事である。私が挨拶をすることになっていた。私は用意していた原稿を読むのをやめ、(気になっているその発言には触れずに) 次のように切り出した。

「こんな話合いをしてもあまり意味はない。と思っている人はいませんか。」

おどろいたようなみんなの視線が私に集中するのが分かる。

「こうした会議は、全国や県下各地で行われています。私が皆さんにお願いしたいのは、一つは、今日の内容を自分の学校や地域に持ち帰り、明日からの実践に生かすことです。そしてもう一つは、『いじめをなくさなければならない』という強い思いをもっている多くの仲間がいることを伝えることです。」

そしてこう続けた。

「もし、誰もいじめを止めようとしなかったら・・・、いじめられている人がいてもみんなが見て見ぬふりをしたら・・・、人を傷つけてもなんとも思わない、平気な社会に、私たちは呑み込まれてしまうかもしれない。」

そう言って私は挨拶を終えた。

私の言葉をみんなはどう受け止めただろう。

期待と不安を抱きながら、会場を去る百人の後ろ姿を見送った。

